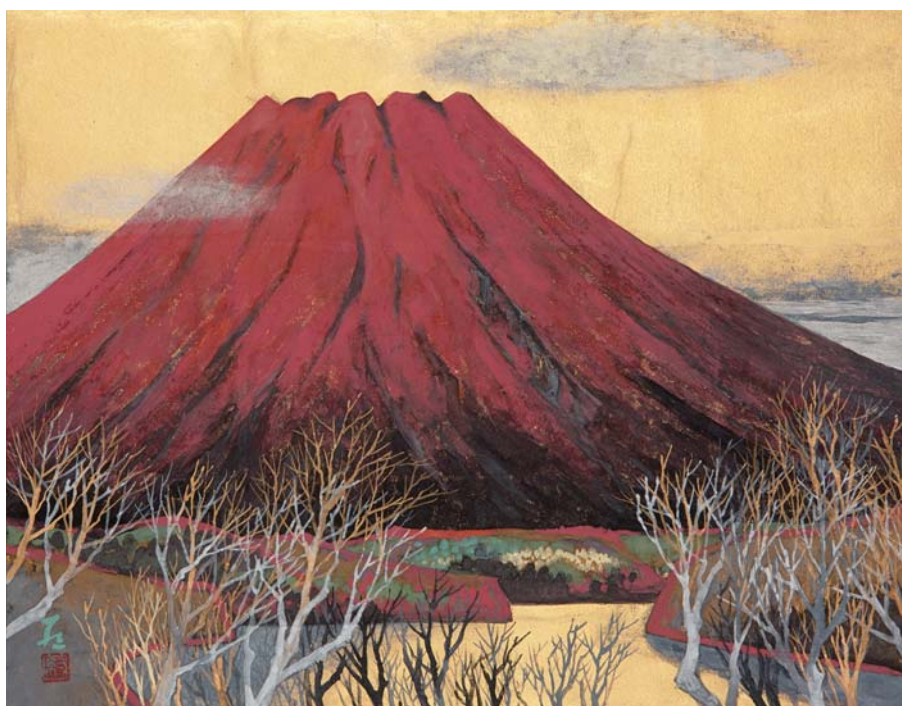


再興第100回 院展金沢展



大矢 紀《赤富士》

■ 新春を寿ぐ

■ 新春優品選【古美術】

■ 新春優品選【工芸】

■ 干支の造形【絵画・彫刻・書】



重文《黒漆螺鈿鞍》白山比咩神社蔵
—石川県の文化財より—

- 12月の企画展示室
- 12月前半の展覧会
- 企画展Topics「工芸にみる石川の巨匠」
- ミュージアムレポート
- 展覧会回顧「鴨居玲展 踊り候え」
- 12月の行事予定
- ミュージアムショップ通信

新春優品選【古美術】

前期: 12月10日(木)~27日(日)

後期: 平成28年1月4日(月)~2月14日(日)

新年を迎えるにあたり、年末から年始にかけて新春にふさわしい作品を展示します。来年は「申年」で、動物にあてはめると「猿」になります。申年に因んだ作品としては、久隅守景の《猿回し図》と狩野宗益の《百鶴百猿図》です。猿は、古代エジプトや中国など世界各地で神聖なものと考えられてきました。日本でも神の使いと捉えた例があります。猿が「去る」に通じることから、難が去る縁起の良い芸として正月などに盛んに行われるようになり、大道芸として広がっていきました。また、猿は馬の守護神と考えられてきたので、既の魔除けや厄病除けとしても重宝されました。

次に、岸駒の《兎に福寿草図》や加賀友禪の《宝船

除の役割も期待されていました。今回の二点は、これまで何度も展示されたものですが、その御利益とともに改めて注目いただきたいと思えます。

続いては、「天神様」です。十二月二十五日の終天神と一月二十五日の初天神は、一年の中でも盛大な天満宮の縁日であることと、今回の会期が「道真忌」を前に終了することから、《繩敷臨水天神画像》、《渡唐天神像》、《胞輪天神画像》の三点を展示します。学問の神であるとともに復讐の神でもある天神は、菅原道真の後裔と公言した加賀藩主・前田家の文化政策の重要な精神的支柱でした。さらに今回は、初釜にちなむ茶道美術や、広義の吉祥モチーフを様々なジャンルから選び、ご来館をお待ちしております。

文のれん《前期のみ展示》に代表されるような縁起の良い作品が登場します。さらには、茶道美術では野々村仁清の《梅花図平水指》(重文)をはじめ、宮崎寒雉の《福寿海尾垂釜》、《青貝福祿寿図香合》、《古赤絵金欄手仙蓋瓶》のほか、茶碗や花入、香合など初釜の季節に相応しい作品を展示します。また、宋時代の精緻を極めた陶磁器の名品などを合わせて展示しますので、年末の忙しい季節ではありますが、美術館で「忙中閑あり」の一時をお過ごし下さい。

なお、展覧会の会期が長期にわたるため、前期と後期の展示替えを行います。後期の展示では、平成二十五年に修復を終えた重文《西湖図》(秋月等観筆)を修復後初公開いたします。



久隅守景筆《猿回し図》

新春を寿ぐ

12月10日(木)~平成28年2月14日(日)

休館日: 12月28日(月)~平成28年1月3日(日)

今回の特集は、年末年始の休館を挟み、来年二月十四日までのほぼ二か月にわたります。そこで、作品保護の観点から一月十五日閉館後に一部の作品を入れ替える前・後期の構成となります。

「新春を寿ぐ」というタイトルから作品を選定するとなれば、まず干支をモチーフとしたものはおさえておく必要があります。そこで今回は、干支の申にちなみ《猿置文鎮》(江戸時代)と《白玉馬猿文鎮》(中国・明時代)を展示します。いずれも猿単独ではなく、馬と関連しているところが興味深いところですが、猿が馬を守ったり、馬の病気を治したりするという、インドから中国を経て日本に伝わったとされる信仰を反映しているようです。また、陰陽五行説から猿は水気の動物として、火災防

除の役割も期待されていました。今回の二点は、これまで何度も展示されたものですが、その御利益とともに改めて注目いただきたいと思えます。

続いては、「天神様」です。十二月二十五日の終天神と一月二十五日の初天神は、一年の中でも盛大な天満宮の縁日であることと、今回の会期が「道真忌」を前に終了することから、《繩敷臨水天神画像》、《渡唐天神像》、《胞輪天神画像》の三点を展示します。学問の神であるとともに復讐の神でもある天神は、菅原道真の後裔と公言した加賀藩主・前田家の文化政策の重要な精神的支柱でした。さらに今回は、初釜にちなむ茶道美術や、広義の吉祥モチーフを様々なジャンルから選び、ご来館をお待ちしております。



《白玉馬猿文鎮》

第3・4・6展示室

干支の造形【絵画・彫刻・書】

12月10日(木)～平成28年2月14日(日)
休館日:12月28日(月)～平成28年1月3日(日)

平成二十七年(二〇一五)年もあとひと月足らずとなりました。未年の年賀状を書いたのがつい昨日のように思われるのではないのでしょうか。来年はもちろん申年。そこで、今年の年末から明年にかけて、絵画と彫刻などで干支の動物たちを描いた特集展示を行います。

子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥・つまり、ねずみ・うし・とら・うさぎ・たつ・へび・うま・ひつじ・さる・とり・いぬ・いのししを、画家や彫刻家たちはどのように描き、また造形したのでしょうか。

主な作品を紹介しますと、日本画では牛を描いた中出信昭《遙か》、安嶋雨昌《牛》、虎を描いた木島桜谷《咆哮》、油絵では南政善の大作《馬並ぶ》、金石

清隆《軍鶏》、田辺栄次郎《見ざる、聞かざる、言わざる》、これは言うまでもなく猿ですが、生き物ではありません。吉田富士夫の《トラ・トラ・トラ》、吉田のトラはかわいらしく、張子の虎のようにも見えます。

庄田常章の《竜のハナ唄》は自画像とも思えるのですが、竜の造形ともみなせ、ちょっとひねった作品です。彫刻では石川光明の《犬》、海野美盛《猪》、木村珪二には、犬をテーマとした作品が数多くあります。清水良治の《見果てぬ夢》、ドンキホーテ、長谷川八十の《軍鶏》いずれも、シャープな造形です。石川彫刻の大家吉田三郎にはウサギや犬を題材にしたものが多いのですが、山羊もまた多くあります。果たして山羊は未(羊)にいれてもいいのでしょうか。



庄田常章《竜のハナ唄》

第5展示室

新春優品選【工芸】

前期:12月10日(木)～27日(日)
後期:平成28年1月4日(月)～2月14日(日)

近現代工芸の展示室では、新春を迎えるにあたって、ふさわしい作品の数々をご覧いただきます。本稿ではその一部をご紹介します。

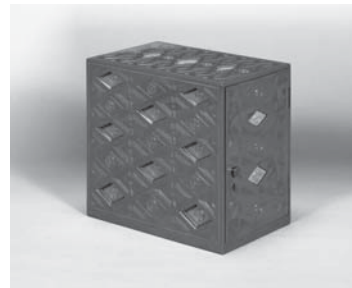
まずは陶芸分野、今年生誕一二〇年を迎えた中村研一の《紅梅図皿》。中村は福岡県出身の洋画家ですが、晩年に初代徳田八十吉の窯で九谷の絵付けを行いました。ふっくらとした筆線やムラのあがる独特の色の塗り方は洋画家ならではのと思わせませんが、単なる余技に終わらない出来映えです。

漆芸分野からは、吉田棟堂《堆朱手元筆筒》。堆朱とは、さまざまな色の漆を何層にも塗り重ねたあとに彫ることによって断面に色の層をみせる、彫漆という技法の一種で、表面が赤色のものを指します。本作は、筆筒の外表面は朱漆で、中の抽斗部分は黄色

の漆で塗られています。透かし彫りされた側面からは、黄、黒、黄、朱の美しい漆の断面を見ることができそうです。

金工分野では、板坂辰治《青銅器「瑞鳥」》を出陳します。板坂は金沢市生まれ。東京美術学校で清水亀蔵や高村豊周に鑄金を学び、戦後は金沢美術工芸専門学校で教官となりました。本作は、方形を基本としながらも自由に弧を描いた躍動感のある形が特徴で、向かい合う二羽の鳩のモチーフが鑄出されています。大胆な器形で青銅器の可能性を感じさせる意欲的な作品といえましょう。

この他にも、染織、木竹工、人形の各分野から優れた作品を展示します。どうぞ美術館で、年末年始のひとときをお過ごしください。

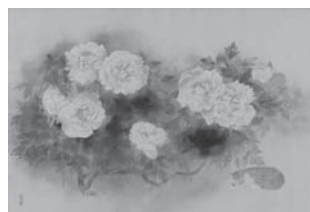


吉田棟堂《堆朱手元筆筒》

再興第100回 院展金沢展

12月10日(木)～23日(水・祝) 会期中無休

日本美術院は岡倉天心らの呼び掛けにより一八九八(明治三十一)年、横山大観をはじめとする日本画家二十六人が集まり創設されました。近代日本画の歩みでは日展とともに、巨大な足跡を築いてきています。



松尾敏男《玄皎想》

射水市ゆかりの文化功労者である郷倉和子氏の近作など同人三十四点、一般からの入選作六十六点の合計一〇〇点が公開されます。金沢展の巡回は二〇一二(平成二十四)年以来、三年ぶりです。日本美術院理事長の松尾敏男氏(文化勲章受章者)の《玄皎想》同人の福王寺一彦氏の《朝陽の中で》など、洗練された作品群をご覧ください。

◆主催／日本美術院、北國新聞社、石川県立美術館、一般財団法人石川県芸術文化協会

◆後援／石川県、石川県教育委員会、金沢市、金沢市教育委員会、一般財団法人石川県美術文化協会、NHK金沢放送局、北陸放送、テレビ金沢、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななお、一般財団法人北國新聞文化センター、金沢ケーブルテレビネット

◆入場料

	当日	前売り	団体
一般	一、〇〇〇円	九〇〇円	八〇〇円
高校・大学生	六〇〇円	五〇〇円	四〇〇円
小・中学生	四〇〇円	三〇〇円	二〇〇円

※団体は二〇名以上

◆連絡先／北國新聞事業部

電話：〇七六一二六〇一三五八

一般社団法人二科会写真部石川支部は今年度第三十二回写真公募展を開催します。これは県内在住の写真愛好家に呼びかけ、石川県の地域文化の創造による写真表現での芸術作品募集を行ったもので、二科会写真部富山支部金山正夫会員とフォトコン編集長藤森邦晃氏との厳しい審査にて六十八点の作品が選出されました。更に二科会写真部石川支部会員が友優待作家作品、今年度二科会写真部東京展での入選作品を加えて、県立美術館の第七展示室で発表いたします。是非ご覧いただき、ご指導ご鞭撻の程賜りますようお願い申し上げます。

◆入場料／無料

◆連絡先／一般社団法人 二科会写真部石川支部

支部長 工俊治

電話：〇七六一一五五一〇九七二

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年三十九回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、県内外からの出品を中心に日本画一〇〇点余を展覧。また、新院展選抜金沢展に出品された秀作も多数展示致します。

◆主な出品者

北出朝之・保科誠・柴田輝枝・村中博文・南好乃・中村勝代・大窪昭子・牛丸美代子・北川真理子・松尾功一朗・伊藤夏子

◆入場料／無料

◆連絡先／丹羽俊夫 金沢市窪一―二三三

電話：〇七六一二四四一五九一六

第8・9展示室

第39回 公募日創展 & 新院展選抜金沢展

12月4日(金)～6日(日) 会期中無休

第7展示室

第32回 二科会写真部 石川支部公募展

12月2日(水)～6日(日) 会期中無休 ※17時閉室

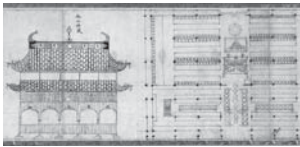
第2展示室

石川県の文化財

10月29日(木)～12月6日(日) 会期中無休

石川県には、歴史的・芸術的に優れた貴重な文化財が数多く伝えられています。加賀藩主前田家の文化的施策が大きな要因となっており、その歴史的背景を基盤とした今日の文化風土は、芸術・文化全般に対する関心の高さを示しています。

当館ではそうした文化財、中でも美術工芸品を中心に収集を行い、県内の社寺や個人の方から多くの寄託を受けています。本展は、石川県の貴重な文化遺産を広く紹介するもので、本県に現在二件所在する国宝をこの機会に展示します。当館の《色絵雄香炉》と白山比咩神社所蔵の《剣銘吉光》です。同時に見ることのできるまたない機会となります。



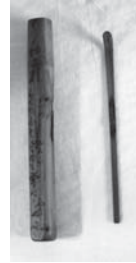
重文 支那禅刹图式(寺伝五山十刹图)部分
大乘寺蔵

前田育徳会尊經閣文庫分館

特集 生誕400年記念 四代藩主前田光高を偲ぶ

10月29日(木)～12月6日(日) 会期中無休

加賀藩三代藩主前田利常の後を継ぐも、僅か三十年という人生を生き切った前田光高の「文武二道」に関連する資料を紹介しています。五歳の筆といわれる《鳥画》や元服の頃の書に始まり、和歌や連歌の世界、利常や夫人・大姫への書状、次に光高の儒教を中心とした学問への深い洞察を示す著作物を紹介します。論語や中庸などの開書は、嫡男綱紀の雑記帳として知られている《桑華字苑・書志》を彷彿とさせます。「文」の最後を飾る光高作の《茶杓》は初公開です。また、光高所用の鎧(初公開)や、利常が光高の死により三歳で家督を継いだ綱紀の武運長久を願って瑞龍寺へ奉納した刀剣で「武」を象徴しています。



前田光高作
《茶杓》

十二月前半の展覧会

本展は金沢・加賀地区ゆかりの作家を中心としましたが、関係の作品・作家だけでほぼ全国の近代彫刻史をも語ることが出来たのではないかと感じています。石川県は近代初の銅像建立である兼六園の日本武尊像建立の例をはじめ、全国最初の工業学校創立や終戦翌年の金沢美術工芸専門学校の開校など、時代の画期において全国に先駆けた活動がみえます。さらにブロンズ・木・石・陶等々、彫刻の各分野において作家が活動しており、県内各地で各々特徴を持つて野外彫刻が設置される等の特徴も窺えます。派手さは少ないながらも近代彫刻史に足跡を示す本県近代彫刻に関心を持っていただければ幸いです。



梶本良衛
《ワ・タ・シ 今ナニヲ》

工芸作品の制作にあたっては、明治期以降、図案の重要性が唱えられてきました。たとえば、明治十三年金沢の工芸有志家によって図案研鑽のため蓮池会が結成され、二十七年画家・荒木探令が図案指導のため来県して図案の研究に力を入れています。また当時は、下絵の考案(図案)とそれに基づく作品の制作を、分業して行うことが珍しくありませんでした。今回展示している、大正十四年第十二回商工省工芸展覧会に出品された木村雨山作《玉蜀黍群虫図》(左図)は、当時、石川県工芸指導所や工業試験場で図案の指導にあたった浅野廉の図案によって雨山が制作したものであり、二枚折の屏風に絵画的に秋の情景が表現されている貴重な作例といえるものです。



木村雨山
《玉蜀黍群虫図》

第5展示室

明治大正期の工芸

10月29日(木)～12月6日(日) 会期中無休

第4展示室

石川の近代彫刻を たずねて

10月29日(木)～12月6日(日) 会期中無休

工芸にみる石川の巨匠

平成28年1月4日(月)～2月14日(日)

本展に出品する作家は、日本芸術院会員に就任、あるいは重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された、石川を代表する工芸作家であり、わが国の近現代工芸の第一人者ともいえる人々です。

日本芸術院は、「芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するための榮譽機関」であり、その会員は部会(美術は第一部)が推薦し、総会の承認を経て文部科学大臣によって任命されます。淵源をたどれば、明治四十年に文部省美術展覧会を開催する際に設けられた美術審査委員会を母体として、大正八年に創設された帝国美術院に始まります。その後、昭和二十二年に日本芸術院と改称され今日に至っています。

一方、重要無形文化財は、昭和二十五年に制定された文化財保護法の中で、「無形の文化的所産で我が国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの」を無形文化財とし、各種の価値ある「わざ」が始めて法律上位置づけられたことに始まります。二十九年の改正では、文部科学大臣が無形文化財のうち重要なものを重要無形文化財に指定し、その際、当該重要無形文化財の保持者又は保持団体を認定しなければならぬと定められ、今日に続く制度のかたちになりました。

いずれも、高度な技術を体得し、すぐれた表現活動を行い、美術文化の進展に貢献してきた作家を顕彰するものであり、本展における作家の作品群によって、石川の工芸の高い水準を感じ取っていただくことができると期待しています。



小松市指定有形文化財
初代魚住為楽《砂張銅鑼 銘 青海波》
昭和12年 小松市立博物館蔵

ミュージアムレポート

今年度の学校出前講座は、十一月にかけて毎週のように開催されました。その学校を紹介すると、十月は一日に小松市立蓮代寺小学校、七日に川北町立橋小学校、十五日に小松市立符津小学校、十九日に加賀市立南郷小学校。十一月は十日に津幡町立中条小学校、十三日は小松市立申小学校、十七日に志賀町立堀松小学校、二十四日に加賀市立作見小学校、二十七日に加賀市立黒崎小学校の全九校です。学校の規模は様々で全校児童に対して鑑賞授業ができる学校も有りますが、児童数が多い学校では高学年を中心に授業を行いました。授業を行えなかった学年の子どもたちに対しては、昼休みなどを利用して展示会場に足を運んでもらい、できるだけたくさんの子どもたちに当館の作品との出会いの場を設けています。

今年度からはこの出前講座で作品を鑑賞する楽しさを学んだ子どもたちにも、他のいろいろな作品とも出会って欲しいと願い、子どもたちの来館につながる取り組みとして、石川県立美術館の国宝にあいきてねと呼びかける「あいきてカード」を配布しています。金沢市内のいろいろな施設をグループで見学する自主プランという行事が行われている学校もあり、春や秋にはたくさん学校の子どもたちが来館してくれています。この「あいきてカード」の配布で出前講座を通じ作品を鑑賞する楽しさを知った子どもたちにも、学校の自主プランを始め、休日の家族のお出かけの時にも来館してもらえよう、美術館の存在をアピールしています。そのことで、出前講座で出会った作品にとどまらず、作品鑑賞の楽しさを広げたり深めたりできるようなきっかけになることを願っています。



没後30年 鴨居玲展 踊り候え

平成27年9月12日(土)～10月25日(日)

鴨居玲の大規模な回顧展を当館が開催するのは、これで四度目でした。没後十年、一五年、二十年、そして今回の三十年展。規模の大きさでは、前三回の展覧会には及ばないものの、充実した素描やイーゼル、絵筆、絵具などの遺品が、多面的に鴨居の魅力伝えていました。六十点ほどの油絵が、鴨居二十歳前後の学生時代、制作に迷い続けた三十代、安井賞を受賞し、その後スペインへと渡る四十代、帰国後、神戸にアトリエを構え裸婦や若い女性を描く五十代前半、そして自画像を日記のように描き続け死へと至る五十代後半と、コンパクトに創作の軌跡を見せます。起承転結が鮮やかな一篇のドラマです。

「自分は画家たりえる存在なのか」、「朝、アトリエに入り昨夜描いた絵に向き合うのが恐ろしい」と、鴨居は日々自問自答したのでした。展示室を廻り、一作一作、じつと見ていくと、ものを創るということは、実に孤独な作業なのだと感じます。徐々にその孤独に耐えられなくなり、自己崩壊をきたす鴨居の姿を思い浮かべた方もいらつしやるのではないのでしょうか。

さて、今回はイベントとして「フラメンコライブ 鴨居玲に捧ぐ」と「イ・スンジヤ 望郷を歌う」を行いました。前者は、日本とスペインのダンサー、歌手、ギタリストによるもので、会場は企画展示室前のロビーです。鋭い靴音と音楽が館内に響き渡り、情熱溢れる踊りは三〇〇名ほどの観客を魅了しました。鴨居はスペインのバーで、こうした激しい音と踊りに浸りつつ酒を飲んでいたのでしょうか。後者は《望郷を歌う(故高英洋に)》のモデルとなったイ・



スンジヤさんが、アリランと日韓の唱歌や民謡を歌い、そして鴨居との思い出、エピソードを語るという内容で、鴨居ファン待望の企画です。事実絶賛の声をいただき、そうした意味でも今回の鴨居展、十分エポック足りえたかと思う次第です。

十二月の行事予定

■土曜講座	午後1時30分	美術館講義室	聴講無料
12日(土)	十三代加賀藩主前田齊泰の能と能装束	学芸主査 村上尚子	
19日(土)	石川の文化財(1)	学芸第一課長 谷口出	
■百万石の文化講座 第3講	午後1時30分	美術館ホール	聴講無料
6日(日)	「前田光高とその時代」 講師/宇佐美 孝氏 金沢学院大学非常勤講師(前市立玉川図書館近世資料館長)		
■キッズ☆プログラム	午後1時30分	2階展示室	参加無料
20日(日)	小学生親子鑑賞講座「千支の造形書に挑戦！」		

次回の展覧会

会期：平成二十八年二月十八日(木)～三月二十六日(土)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室
「婚礼調度の美」	「春の優品選」【古美術】
第3・4・6展示室	第5展示室
「石川の美術 近代編」	「石川の工芸Ⅲ 食を彩る」
企画展示室 会期：平成二十八年一月四日(月)～二月十四日(日)	
企画展「工芸にみる石川の巨匠」	





松田権六《蓬菜之棚》 当館蔵



灰外達夫《神代杉挽曲造木象嵌食籠》 当館蔵



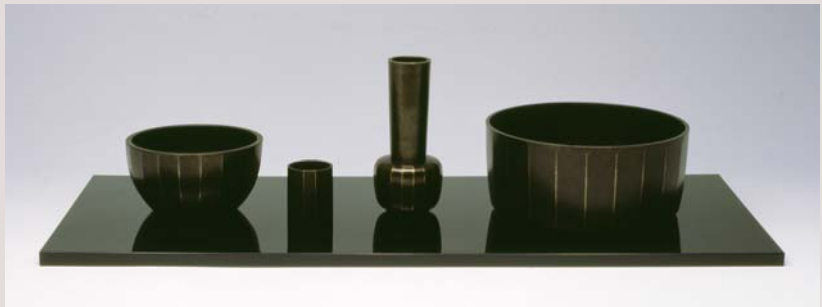
二代浅蔵五十吉《釉彩華陽錦鉢》 当館蔵



木村雨山《友禅訪問着「魚のむれ」》 当館蔵



三谷吾一《集》 石川県輪島漆芸美術館蔵



三代魚住為楽《砂張皆具》 金沢市立中村記念美術館蔵



《猿回し図》を選ぶのもよし、新春にぴったりの鶴文様、松田権六《蓬菜之棚》を選ぶのもよし。ミュージアムショップでじっくり悩んでくださいね。

県立美術館も、コレクション作品の絵はがきをたくさんご用意しています。来年の干支にちなみ、久隅守景の

ら、一枚を選ぶのもいいですね。
美術館ですてきな作品にめぐりあうと、そのすばらしさを誰かに伝えたくありませんか？直接見せてあげられればいいけれど、次にいつ来られるか、この作品にまた出会えるか……。そんなときに美術館の絵はがきで、おたよりをお書きになるのはいかがでしょう。お気に入りの絵はがきを集めるのも楽しいもの。これは色がすてきな作品だった、こっちは色がすてきに似ている！なんて思い返しなが

ミュージアムショップ通信

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金

今月の開館時間

午前9:30~午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00~午後7:00 年中無休

12月の休館日は
7日(月)~9日(水)・28日(月)~31日(木)

広告

片山津温泉

22種のお風呂で
おくつろぎ下さい

<http://www.kagakankoh-hotel.co.jp/>

日本海の海の幸や加賀の美食なら



〒922-0412 石川県加賀市片山津温泉ウ 41
加賀観光ホテル予約センター 受付時間 9時~20時

Tel. 0761-74-1101

石川県立美術館だより
第386号(毎月発行)
2015年12月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>